

先生。江戸時代に絵本があったって本当ですか？ 江戸の庶民文化を通すと 現代はどう見えますか？

2019.12.20 (金) 19:00-21:00

東京学芸大図書館カフェ note cafe

一般 ¥1500 学生 ¥500 1ドリンク付き

黒石先生と

トークゲスト：黒石陽子 教授

東京学芸大学・人文社会科学系

一緒に

マスター：藤井健志 教授

東京学芸大学・人文科学講座 / 元 副学長

世界を面白がる

聞き手：熊井晃史

東京学芸大子ども未来研究所・とをがギャラリー



【お申し込み】

席に余裕がある場合は当日受付も可

Vol
34

話は、あの桃太郎から始まった。黒石先生がスライドで見せてくださった250年ぐらい前の江戸時代の絵本には、桃太郎の誕生場面が描かれていたのだが、しかしどうも、この桃太郎は、あの桃太郎とは様子が違っている。桃太郎は若いお母さんから生まれたばかりで、産湯をつかっているのである。私たちが知っている桃太郎は、川の上流から流れてきた桃をおばあさんが割ってみると（おじいさんだっけ？）、中から元気な子どもが出てきたので「桃から生まれた桃太郎！」と名付けられたといった話だったように思うのだが。

江戸時代の話は、川の上流から桃が流れてくるのは同じらしいが、それをもって帰って老夫婦で食べちゃうのだそう。ところがその桃を食べると、おじいさん、おばあさんがどんどん若返り、途中は省略するが、若夫婦となった二人の子どもが誕生するのである。だから絵本に描かれた若いお母さんとは、実は桃太郎に登場するあのおばあさんだったのである。

私たちは「日本昔ばなし」とか言われて、あの桃太郎の話が昔から伝わってきたように思っているが、私たちが知っている昔ばなしは、どうもそれほど古いものではないらしい。いや、江戸時代の絵本に描かれた昔ばなしには、今では思いもつかないほど様々なヴァリエーションがあったと言うべきか。

昔ばなしの中で、キツネの嫁入りとか、ネズミの嫁入りといった話は、細部は知らなくても、名前ぐらいは知っている人が多いのではなからうか。ところが黒石先生がもってきてくださったのは、なんとバケモノの嫁入りの絵本であった。ろくろ首のお姉さんの嫁入りの図である。周辺にはいろいろな妖怪が書かれており（ちなみに妖怪という言葉は江戸時代には使われていなかったとのこと）、中には手塚治虫の漫画に登場するスパイダー（若い人はおそらく知らないであろう）みたいなものもいた。

17世紀の後半ぐらいから、表紙を赤く染めた赤本と言われる、主として子供向けの絵本が盛んに出版されるようになり、それがやがて18世紀に入り、黒本、青本、黄表紙とだんだん大人向けのものに成長していくようだ。日本史で名前だけ憶えたものの読んだことはないのだが、式亭三馬の「浮世風呂」（19世紀初めのもの）には、子どもたちが絵本ばかりを読んで困ったものだといった感じの母親同士の会話も出てくるらしい。今日の漫画やアニメと似たようなものだったと言ってよかろう。ただ、山東京伝とか滝澤馬琴といった江戸時代の小説家たちも、子どもの頃はこうした絵本を見て育ったはずだということで、漫画やアニメに現（うつつ）を抜かず現代の子どもたちも、もしかしたら将来、大小説家になるかもしれない。

黒石先生は、絵本の他にも絵の入った相撲の番付表や、歌舞伎の宣伝チラシ、さらには店の宣伝ビラももってきてくださり、スライドを見ながら詳細に解説をしてくれた。素人では読み取れない絵の細部についても説明をしてくださり、目からウロコが何枚落ちたことか。日本人はもしかして、言葉と、絵などのビジュアルものの組み合わせに昔から親しんできたのかもしれないといった議論も出た。

いずれにしても、江戸時代の日本人はこうした絵本やさらには演劇で、文化に関する様々な知識を共有していたという。それも、ただ単に知識を受け取るだけでなく、各自が思い思いに展開して、多様な話を生み出していったのである。現代の勉強とは違って、なんと楽しいことか。いや、そもそも黒石先生が江戸時代の昔ばなしや歌舞伎のストーリーを歯切れよく語ってくれるのを聞くだけでも、十分に楽しかった。

黒石先生は、本来、文楽などの人形浄瑠璃の専門家である。役者に合わせて少しずつ話が変わっていく歌舞伎よりも、人形浄瑠璃の方が作品世界が

しっかりしていて、おもしろいとおっしゃる。この日は、絵本の話がおもしろくて時間がなくなり、人形浄瑠璃まで話があまり届かなかったが、黒石先生が人形浄瑠璃に惹きつけられたお話など、相当興味深いものなので、またの機会に詳しくうかがいたいものである。

付け加えると、当日は大学の近所にある結城座の結城孫三郎氏が、聞きに来てくださった。江戸時代から続く糸あやつり人形の劇団の十二代目である。「古典」というものに対して、辛辣なご意見を開示してくださったが、いずれまたそうしたことについても、おうかがいしたいと思った。

藤井健志

東京学芸大学教授・元副学長／まちのカルチャーカフェ主宰・マスター
東京学芸大図書館カフェnote cafe 発起人

